

## 公益財団法人日本国際連合協会会長賞受賞

「もし私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか—歴史を忘れた民族に未来はないか?—」吉川優姫さん

「歴史を忘れた民族に未来はない。」昨年サッカーの日韓戦で、韓国側のサポーター席に掲げられた横断幕の言葉です。その脇には、伊藤博文を暗殺した韓国独立運動家の安重根、そして、文禄・慶長の役で、水軍を率いて豊臣秀吉を撃退した李舜臣の、巨大な肖像画がありました。なぜ、スポーツの場にまで、このような問題を持ち出すのでしょうか。

私の母は、韓国人です。日本で生まれ育ち、日本国籍の私は、これまで、韓国人の血を引いていることを、ほとんど意識したことがありませんでした。しかし、日本人を挑発するような言葉が私を変えたのです。自分の中に流れる日本と韓国、両方の血を意識した時から、私のルーツ探しが始まりました。

母に聞いたり、韓国・済州島に住む祖父に電話をしたりして分かったのは、次のようなことでした。私の曾祖父は、1912年、済州島に生まれました。日本による韓国併合から2年後の事です。日本で勉強するために自らの意志で日本に渡った曾祖父は、日本で結婚、韓国に帰国して祖父が生まれます。戦後、祖父も日本で教育を受けたいという思いから日本に渡り、そこで私の母が生まれ、母は日本人の父と結婚、私という命につながるのです。今は、済州島で暮らしている祖父に、日本での生活に不安がなかったか、を聞いた時の答えが印象に残っています。

「あの頃、韓国人は日本人の良さを素直に認めていたよ。辛いこともあったけど、親切にしてくれた日本人も多かった。戦後、貧しかったけど、一人の人間同士、助け合って生きていたんだ。」意外だった祖父の言葉で、私は、ある人物を思い出しました。旅順の刑務所で安重根の看守を務めた千葉十七という人物です。千葉は、最初は、伊藤博文の暗殺者として、安に憎しみを抱きますが、安と接していくうちに、その高潔な人格に惹かれ、毅然とした精神や高邁な平和への理念に感銘を受けるようになります。安の処刑後、千葉は、故郷の栗駒に帰り、遺墨を仏壇に供え朝晩手を合わせ続けたといいます。国と国とが憎しみ合っていた時代、一人の人間同士として向き合った、安と千葉。この二人に、祖父が言っていた「一人の人間同士として助けあって生きていた」という言葉が重なりました。

先日、7年前に中国で行われた日中の女子サッカーの試合のことを知って驚きました。試合後、反日一色の中国サポーターに向けて、なでしこジャパンの選手たちは「ARIGATO 謝辞 CHINA」という横断幕を掲げたのです。翌日の中国の新聞は、「日本の選手は、不快な感情を乗り越えた」と論評し、「試合には勝ったが、度量の点で日本に負けた」という声がネットにあふれたと言います。今、韓国や中国は日本の歴史認識を揺さぶり続けています。これに対して同じ土俵で反論すれば、紛糾の度は増すばかりです。今、必要なのは、感情を乗り越え、国境を越えるような「包容力」を、自ら示すことではないでしょうか。

済州島にまで辿りついた私のルーツ探し。その道のりで気付いたのが寛容で柔らかな「包容力」のもつ重さでした。私には国連などの国際機関で働きたいという夢があります。先日、韓国人である国連事務総長パン・ギムン氏の演説をうなずきながら聞き入っているうちに、私は、ふと自分が事務総長として国連の総会の会場で、演説をしている錯覚にとらわれ、次のように世界の人々に語りかけていました。

「“歴史を忘れた民族に未来はないか?” その答えは、私たち、一人一人の姿勢にかかっています。不幸な過去を乗り越えるには、歴史を直視したうえで、心の中に、“寛容で柔らかな包容力”を築く事です。国連のユネスコ憲章にもあるように、“戦争は人の心の中で生まれるもの”。だからこそ、私たちが心の持ち方を変えなければなりません。あなたが自ら包容力を示せば、相手も変わります。その小さな変化が輪になって広がり、やがては民族の違いや国境をこえた大きな連帯をもたらすのです。心の中に平和のとりでを築きましょう。そして、輝く未来を私たち自身の手で、引き寄せるのです。私は事務総長として、このことを世界各地で訴え続けていきます。」

白百合の皆さん、こんにちは。卒業生で現在はテレビ局で報道記者をしている吉川優姫と申します。わたしは高校生活を振り返り、今でもターニングポイントになったと感じるのが弁論大会への挑戦です。結果としてNY国連本部へ派遣にいった私は自分と価値観の違う人と会話をする難しさや楽しさ、そして立場や価値観が違う人ほど連絡をしてつながり続けることが自分の成長に大きな影響をくれるという発見がありました。その気づきはいまの自分に繋がっていると感じます。

冒頭でもお話しましたが現在はテレビ局で報道記者をしています。毎日のように取材をしていますが、宮城県にも甚大な被害をもたらした台風19号の日からは取材環境ががらりと変わりました。海と化した市町での取材は心が痛くなるのが何度もありましたが、「取材してくれてありがとう」「記者さんも大変ね」「また来てね」の一言は目頭が熱くなる瞬間でもありました。視線を合わし、相手を知ろうとする気持ちがあればいつかは私の報道で誰かを助けることができる、自分も成長できる、こういう考えを出来るようになったのは弁論大会での学びが大きかったなと今になって感じます。

皆さんが何気なく過ごしている日々が数年後になって、実は大きな出会い・挑戦だったと気づく時が来るかもしれません。1つ1つの出来事や出会いを大切に、気になったことには挑戦してみてください。後輩のみなさんにとっても白百合での生活が未来の自分に繋がることを願っています。



国連大学にて (2014年)